

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## パネル・ディスカッション

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 清水, 康行, 小林, 千草, 田中, 牧郎, 齋藤, 希史, 土屋, 礼子, 小木曾, 智信 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00000931">https://doi.org/10.15084/00000931</a>

# パネルディスカッション

パネリスト…清水康行、小林千草、田中牧郎、齋藤希史、土屋礼子

司会…小木曾智信(国立国語研究所)

**小木曾** これからパネルセッションを開始します。時間が限られており、短い時間でのパネルとなりませんが、最初に会場からたくさんのご質問をいただいておりますので、それについて講師の方からご回答をいただきます。順に、お一人五分程度でお願いします。

**清水** まず、「ヨーロッパなどの標準語化の歴史を簡単でいいから教えてほしい」というご質問です。さきほど、一九世紀末から二〇世紀にかけて日本で「国語」「標準語」が問題になると申しました。ヨーロッパでも、ドイツ人の国家としてのドイツとか、イタリア人の国家としてのイタリアができるのは、明治維新とあまり変わらない時期です。イタリアがイタリア王国として統一されたのは一八六一年、ドイツもプロイセンが力を伸ばしてドイツ帝国が成立するのが一八七一年で

す。フランスが普仏戦争で負けて新しい時代にはいるのもその時期です。一九世紀半ば以降、ヨーロッパにおいても、ドイツ語とかイタリア語とかの「〇〇語」が「国民」「国家」と結びついたかたちで意識され、そこで「正書法」やその言語における言語教育、つまり国語教育が展開されていきます。さらに、その



小木曾 智信

国の議会でどんな言葉を使うべきか、使つてはいけないかといった議論もされます。日本が国語・標準語議論を展開するほんの少し前の時代に、ヨーロッパでもいわゆる国語の時代にはいつていきます。そんなに古いことではありません。日本の国語改革運動の流れは、そうした欧州での国民国家形成の流れをかなり意識して展開されるという側面があります。私の話の補足にもなるありがたい質問でした。

また、複数の方から、学制と並べて指摘した徴兵令に関して、「徴兵令によって日本中の若い男性が軍隊に集められ、そこである種の軍隊言葉、軍隊教育による共通言語といったものが出てくる。これが言語の共通語化、標準語化にどんな役割を負ったのか、それについての評価をもっとすべきではないか」とい

うご指摘がありました。このことは私も前から考えてはいるのですが、なかなかうまく整理をすることができていませんので、今後の宿題とさせていただきたいと考えております。

ただし、軍隊に徴兵ではいつてくるような人たちは、わりに地方ごとにまとまって「○連隊」を構成しますので、兵卒レベルでは案外、方言的な色彩が強く生き残ったということもあります。

また、日本の軍隊を考えていくとき、陸軍と海軍とで性格が随分違ってきます。これはちよつとずれた答えになりますが、国語問題・国語教育を論ずるとき、国民のどの層を想定するのかという問題があります。明治末年に漢字や仮名遣いについて大きな議論がありました。小学校教育しか受けられない人々をターゲットに、よりやさしい表音式仮名遣いにするか、当時で言うところの国民の何パーセントにもならない中学以上に進学できる人たちに期待して、歴史的な仮名遣いを採用するべきか、という深刻な論争が行われます。そのとき、陸軍の代表で出てくるのが軍医総監の森鷗外（一八六二―一九二二）です。彼は、「陸軍の意見も聞いて私は言うのだ」と脅し



清水 康行

をかけて、激烈な表音式仮名遣い批判をして歴史的仮名遣いを使うべしと主張します。一方、海軍の代表は伊地知彦次郎（一八六〇―一九二二）という日露戦争時の戦艦三笠の艦長で、当時の海軍教育本部の部長です。伊地知は「海軍としては将兵の教育のためには仮名遣いは簡単なほうがいい」と主張し、表音式仮名遣いを進めるよう議論していきます。軍隊の問題を考えていくとき、陸軍がどうだったか、海軍がどうだったかもきちんと見ていくことが重要だと思えます。

ただ、こういうことについて生き証人になってくださる方が、いよいよ最高齢者になりつつありますので、今のうちにやっておか

なければならぬ宿題として受け止めておきたいと思えます。

他にもいくつか質問を受けておりますが、時間になりましたので、申し訳ありませんが、これでお答えとさせていただきます。

**小林** まず、「文末の「わ」は江戸時代では男女ともに用いられていたと見られますが、女性語のマーカールとして機能するまでに、男性の会話文への現れ方はどのように変化したのでしょうか」というご質問がきています。これは、気づきとか言い捨ての文末辞として、男性はそのまま「〜だワ」「あつたワ」（ワは下降調）で、現在の関西弁の「ワ」と同じですね。そんな感じで江戸期でも使われていたと考えられます。

「わい」は、男性も女性もけっこう使っています。今も方言に残っているところがあります。たとえば、「〜だわい」「〜ですわい」とか。江戸時代の講義や説教の場で、「〜わい」などは、最後をしめくくる文体として使われています。ただ、女性の場合、私が言いたいのは、「わいな」「わいの」とか、あるときには「わいなあ」「わいのう」とか、すごく艶めかし

い音調をかけると、遊里で使われていたことばとなり、そのような表現から再生産させて明治の「新しい女」の自己主張を表す「〜わ」ができたプロセスを見つめ直すことの重要性です。男性は言い捨てという表現法で「〜ワ」を使っていますが、女性たちはそうではないかたちで、「です」「ます」にもあうかたちのもの（音調・抑揚）を選び取っていた。幕末から明治二、三十年、もう少しスパンを長く言うと三〇年、六〇年かかったかもしれませんが、選び取っていったということに注目したいと思います。

もう一つは、「江戸語的な「わ」と、明治のお嬢様ことば的な「わ」には、接続する語の違いなど、形式的な差異は見られますか」というご質問です。やはり、江戸時代後期〜幕末の女性たちが自己主張の手段（表現法）として「わ」を使おうとしたとき、投げ出すのではなく、「です」「ます」につけて冷静で丁寧な説得力をもたせようとしてきました。それが、使いこまれ、広く真似されて、後には、もう女学生の会話の月並みな文末辞となっていく。女学生の会話で「〜だわ」「困っちゃったわ」のような言い方がいっぱい出てくると、もう

形式的になつていると考えられます。漱石作品の女学生の会話（たとえば、『吾輩は猫である』の雪江さん）には、その可能性が強い。同じ作品でも女学生なのか、女学校を出てまだ間もないのか、随分年数がたっているのかなど、年代差と文脈のなかで読み解いていくほかないということでございます。

また、「お姉言葉について、最近外国人研究者の本が出ましたが」という前置きがありましたが、私ちよつと不勉強で、どういふ本なのかわかりません。あとで検索してみたいと思います。

そのコメントの続きは、「従来研究をされてきた女ことばとどのような関係にあると先生



小林 千草

はお考えでしょうか」という質問になっております。お姉ことばと女ことばは、もちろん歌舞伎が最盛期のころ、女形と言われる人の<sup>こわ</sup>声やセリフは、わりと遊里のことばと重なる部分がありますが、それを真似るのは江戸時代にもありました。しかし、ここで言うっておられるのは、明治後半以降完成された、いわゆる「ですわ」「だわ」「おもしろいこと」「嘘ですもの」「よくって」のような女ことばを指していると思います。このようなことばは、私がさきほどご説明した自己主張にふさわしい言い方を求めて選び取った、プロセスを経ることがある、苦心の「わ」ではありません。仕上がってしまった——素敵な女学生や女学生あがりの若い女性たちが使う女ことばです。ちよつと素敵なお嬢様やそのお姉さまたちが使っているのを、男性でそういう姿勢・口調を真似することを職業上選んだ人が使うということですね。

現代、そのことばさえ変わってきておられます。IKKOさんは「〜よね」「なんぼー」のような言い方が多いですね。ところが、ちよつと年代が上のおすぎとピー子さんは、「〜だわ」「すごい」「すごくおもしろかつ

たわ」というふうに年代差が出ています。おすぎとピー子さんのような方が減っていくと、「わ」そのものもお姉ことばとしてかなり使われる数が落ちていく。一方、「〜だよね〜」とかいうことばはまだまだ生きていくと思います。

コメントの最後に、「お姉ことばが現実の女性の話しことばに変化をもたらすものでしょうか」と書いてありますが、これは考えられません。むしろ新しい、今の女の子たちが、男ことばを少し使いつつ、女性として、自分はいき、それがマスメディアに取り入れられて一つの流れになれば、それを真似る次世代の新たな若お姉たちが生まれてくるかなと思います。

「わ」の研究にあたって、私がとても気になっていることは、インターネットで見た記事ですが、大島優子さんの言動に対して、大島さんをとても信奉している宮澤さんというAKB48の一人が言ったことばの表記形態にあります。「大島優子すくくない? こんなふうに生きたかったわ。誇りだわ」と、「わ」を使っているのですが、これはweb記事に反

映された会話文としての「わ」ですが、正確には、従来の女ことばの「わ」ではありません。同時に「舌をまいていた」という文脈があるので、「こんなふうに生きたかったワ。誇りだワ」のように強めて下降調に発音したものと推測されますが、文字になったとき、そのまま「わ」で、しかも平仮名なんですね。よく注意して見分ける必要があります。ですから、一〇〇年後二〇〇年後の国語史を研究する人は、女性語のマーカーとしての用法なのか、下降調の強調表現としてのものなのか、音声が伴わなければ判定が大変だろうなと思います。この事例をもって、「わ」の研究のしにくさをおわかりいただければと思います。以上です。

**田中** まず、コーパスの使い方に関して、「努力」と「つとめる」のような類義語の存在は検索できますか」という質問です。今のコーパスではできません。私は、国語研究所が出している『分類語彙表』(大日本図書)を使いました。たとえば、今日、「優秀」と「すぐれる」など七〜八語の類義語の関係をグラフでお示しました。意味によって語彙を分





田中 牧郎

類してある『分類語彙表』という語彙リストには、「優秀」あるいは「すぐれる」を引くとその類義語が数十語示されています。それをすべて『太陽コーパス』で検索して使いました。そのように、初めから〇〇という語彙の類義語を調べたいと決まっているときは、このようなやり方ができます。また、今日お話しした、解析をして単語に分けて見出し語をつける「UnDici」を使うと、コーパスに使われている単語の五十音順の頻度表をつくることができます。五十音順の単語表ができたなら、『分類語彙表』のリストも電子化されたものが申請すれば手にはいりますので、それを読みと見出し語とで関連づけて一つのデータベース

に入れることで、類義語の頻度表をつくるこ

とができます。ただし、『分類語彙表』の単語の単位と「UnDici」の単語の単位がかなり違いますので、今言った機械的なやり方だけだと、かなり採り落としがあります。一応目安として『分類語彙表』を機械的に使えますが、まだそのまま使えるようにはなっていません。見直しをして、手で直していく段階を経る必要があります。国語研究所の事業の目標として、将来的には、『分類語彙表』のような意味分類のデータベースとコーパスとを関連づけて、言語資源が使えるようにすることを目指しておりますが、現段階では今申し上げたような通りです。

次は、「当て字のようなものが和語のふりがなについているものも含まれているか」という質問です。

『太陽コーパス』では、ふりがなも検索することができます。『太陽コーパス』には「ひまわり」という検索ソフトがついていますので、そこで「ふりがなを検索する」という欄に「つとめる」と入力すると、「つとめる」というふりがながついていろいろな表記の語彙が検索できます。以上が「コーパス」の使い方に

ついでのご質問です。

次は、「類義語の関係のうち、「つとめる」「努力する」というペアと、「すぐれる」「優秀」というペアは同様に考えてよいでしょうか」というご質問です。今日お話ししたことは、日本語に漢語が溶け込むという話です。漢語が日本語に溶け込んだ主な理由は、意味の変化によってだと述べました。この意味変化は、漢語だけに起こったわけではなく、対義語、類義語の全体に起こっております。「つとめる」と「努力する」、「すぐれる」と「優秀」も、それから「あらわす」「あらわれる」と「実現する」「表現する」も、すべて同じような流れをとったと考えてよいと思います。

ただ、和語と漢語がほぼ同じ意味なのか、違う使い分けをするのかは、個々の類義語群、あるいは同じ類義語群のなかで、どの語とどの語を比べるかで違います。しかし、基本的に、和語を含む一連の類義語群の変化のなかで、漢語の日本語化、日本語への溶け込みが進んだという点では、同様に考えてよいと思っています。そういったことがコーパスによっていろいろ見つかったということが伝わったとしたら、私の目的が達せられたと思

います。

最後に、「たとえば、「実現」「表現」「優秀」と表に例示されたものは、いわゆる和製漢語なのでしょうか」というご質問と、それから関連して、「グラフで明治時代から大正時代に減っていく漢語がありました、その漢語の中身について和製漢語・新漢語と、もともと使われていた漢語と、意味変化を起こした漢語の比率がどれくらいか」というご質問です。

まず、個々の漢語が和製漢語かどうかを調べるのは大変です。中国にないということを確認しなければならぬので、これは事実上不可能です。『大漢和辞典』や、中国の主要な作品の索引類、あるいは中国で構築されてい



齋藤 希史

る中国語コーパスを見たうえで、一つひとつ見ていかなければなりません。たとえば、今日扱った中で「努力」は、中国に存在が確認できず、できないものもあります。しかし、

中国で使われた実績があっても、今日お話ししたような和語との意味関係において日本語で使われ始めたのは、意味用法まで含めれば、今日扱ったものほとんどすべては日本で使われ始めた漢語、日本的な使われ方をした漢語です。その使われ方のはじまりは、特に中国語とは関係なかったと言っただけです。もちろん、齋藤先生が扱われたように、最初に英華辞典などを見る、あるいは洋学者、漢学者などが自分が学んできた漢籍の知識をもとに、使ったことはあるかもしれませんが。しかし、それは中国語で使われていた単語をそのままの意味で持ってきたということではありません。その意味で、広い意味で和製漢語と言っただけだと思えます。

そして、比率についてはわかりません。一語一語コーパスの用例の分析をして、これはこのタイプ、これはこのタイプであるということを見ていく必要があります。その作業はまだ大変です。タイプ別の比率を知ること

とは、意味・用法を分析する作業を経たうえでないとできないと思えます。

**齋藤** いただいた質問に順番にお答えします。

まず、「学術用語から現代でも普通に使われているものについて、他にないかあるか」という質問です。これについて、二つの面からお話します。一つは、今日お話しした「雰囲気」と似たような経緯を持つ語彙に「風化」があります。「経験が風化する」「体験が風化する」と最近よく使われますが、もともと「風化」の「風」も「化」もよい意味でした。文化がそこに行き渡るとか、徳が行き渡るといったような儒学的な意味だったのです。これとは別に、中国の本草学、さらには日本の蘭学でも、石灰の分解などと関係して「風化」という語が現れて、これが近代の地質学用語の「風化」という翻訳語と結びつきます。さらにそれが比喩的に用いられて一般にも広まりました。このように科学技術用語が普通の用語としても広がった例がよく見られるのですが、自然観察や地質学系、気象学系の言葉にそのようなものが多いのかなと、なんとなく感じております。

もう一つは、今日の話だと、まるで明治のはじめに大きな変化があったといった印象をお持ちになられた方が多いかと思いますが、じつは、もう一つ波があるようです。たとえば、前に新聞のコラムに書いたことがあるのですが、「観光」「福祉」は今でも普段よく使っていますが、これは明治期の末ごろから大正期にかけて、特に政府や役所側が使うようになりました。さきほど土屋先生が言われた帝国土語の世界、大日本帝国語というかたちで、こういった漢語が多用されて定着していく過程があるようです。これも一つの波として考えることができるのではないかと思います。

また、「外国語のわからない言葉が氾濫しているが、TPPなんかどう捉えたらいいのか」という質問です。

こういう翻訳語の位相について、たとえば、柳父章さんなどは「カセット効果」と表現されたり、鈴木孝夫さんは「ニーズ」という言葉は、英語の「ニーズ」の翻訳じゃなく、「需要」「必要」といった漢語を「ニーズ」に言い換えているだけだといったようなことを言われています。翻訳語についてはこれまでさまざまな議論があるわけですが、そのうえでな

お、何か私が出すとすれば、近代の日本語は、この語彙は表面的にこうだけど、その裏側に何かついてますよというか、ある意味でこう側が見えない翻訳のシステムを内包してしまっているところがあります。それにわれわれは、なんとというか、非常に注意深く、敏感であらねばならないのではないか。それは一方で、日本語の語彙の豊かさをもたらしていますが、向こう側が見えない、意味がわからない、なんとなくわからない言葉でも使ってしまう文体を、私たちの言葉が獲得してしまった。あるいは、そういう状態になっていくことについては、功罪両方含めて常に意識していかねばならないのではないかと感じて



土屋 礼子

います。

**土屋** 「どの講師への質問ですか」という欄で「特になし」とお答えいただいた質問のなかから、私で答えられる範囲で答えさせていただきます。「ラジオ、テレビといった大勢向けのメディアが方言衰退を加速させたと思われるが、いかがですか」

そうだと思います。特にラジオは、標準語を意識してつくられましたし、方言などを放送しないことを前提としておりました。それが崩れたのが、ここ一四、五年ほどだと思います。「あまちゃん」とかいろいろな番組で、今や方言が流行りですが、あれは「もどき方言」と言ったほうがよいでしょう。方言などだけでなく、いくらかわかるようにつくった方言です。なので、ある種つくられたローカルが今流行りになっています。これは新しい現象で、別のお話になるかと思えます。

もう一つ、「漢文や古典は明治以前までは特定階層のものでしたが、明治以降になっても内容や教え方は同じだったのでしょうか。国語教育にどんな影響を与えたのでしょうか」という質問です。



基本的に、漢文や古典は中等以上の教育で行われたもので、初等教育の範囲ではなく、高等教育を受けられる人たちにどのような影響を与えたかということになるかと思えます。漢文や古典と一口に言っても、四書五経から「源氏物語」までいろいろ幅があつて、そのなかのどれを選ぶかはその時代によってかなり差があります。それから、基本的に男性と女性それぞれ別々の学校でしたので、女性向けに選ばれた古典は、たとえば『源氏物語』といった和歌、和文を中心としたものを中心だったし、男性向けには四書五経的なものが中心であつた。また、時代によって、たとえば『源氏物語』は、戦時中是不謹慎であるというか、あまり適正でないというので抑圧されたりします。一通りのことは言えません。しかし、漢文の教育について、素読から講読にはいるという手順はどんどん崩れてゆきました。それは学校教育のなかに取り入れるとき、無理があつたんだと思います。日露戦争（一九〇四〜〇五）頃までは漢学塾がさかんにあつて、そこで基本的に江戸時代と同じようなかたちの教育が引き継がれていたと思えます。その後、学校教育に統一されていく段階

において、かなり変わったと、非常に大雑把ですけれども言えるかと思えます。

もう一つ、「標準語の確立過程でも各地の方言や、植民地地域の言葉を維持していこう、守ろうという研究や政策はなかったのでしょうか」という質問。これには答えづらいのですが……。たとえば、アイヌ語の研究ですが、いろんな方言や植民地の言葉の研究を言語学者が行ってきました。それはある意味では国語政策と裏表になっていましたので、それを守ろうという政策的なものがあつたかという、それは違うと言わざるをえません。ただし、方言を何らかのかたちで守ろうというような運動として私が思い浮かべているのは、識字の関係から言うと、綴り方教育、綴り方の運動ですね。あれは言文一致運動が始まって、しばらくたった時期から始まっています。生活のなかでの方言も含めて、その生活の言葉で書こうということ子どもたちに教育するということを書いています。これは標準語からはずれた表現でも書いていこうという部分があつたのではないかと思っています。以上です。

**小木曾** ありがとうございます。残りが一〇分足らずですので、これからパネルディスカッションをするには明らかに時間が不足していますが、質問の補足、あるいは他の方への質問で補ったほうがよいようなことがございましたらお願いしたいと思います。清水先生お願いします。

**清水** 国語研究所の方にお答えいただいたほうがよいような質問が私のところにかけています。「国語改良志向の流れが昭和二三（一九四八）年の国語研究所設立につながっているのか」ということと、現代における、特にローマ字入力における正書法の不在、不確立を嘆いていらつしやる質問があります。国語改革、あるいはその正書法とか仮名遣いと国語研究所とのかかわりを、田中さんなり、小木曾さんなりから簡単にご説明いただければと思います。

**田中** それでは、私が国語研究所の職員、研究員として考えていることを簡単に申し上げます。今日の先生方のご講演にあつた通り、確かに文部省、文化庁と続いてきた国語政策の流れは戦前から始まっています。特に清水先生のご講演にあつた通り、その直接的な流

れは上田萬年（一八六七～一九三七）や、「国語調査委員会」（一九〇二）から始まっております。そして、上田以前にもさまざまな論者たちが、近代の日本語をどうすべきかを論じていました。たとえば、今日紹介した『明六雑誌』などにも洋学者がさまざまな立場で言語論を展開しております。体制が整って、国立国語学研究所が設立されたのは昭和二三年でしたが、国の言語研究機関をつくる、つくりたいという願いは戦前から続いてきて、それが昭和二三年に実現したのだと思います。

そして、現在も国立の国語研究所は日本語をどうすべきかを考える使命は引き続き持っています。ご質問のように、正書法が確立していないという問題もあります。しかし、これまでの国語政策では、文字表記に関する施策は、仮名遣い、当用漢字、常用漢字とかな

りやられてきており、一定の成果はあがっていると思います。しかしながら、今日小林先生が扱ってくださった話しことばでのことば遣いや、私が扱ったような語彙、そして齋藤先生が質問に答えてくださった新しい外来語の問題は、従来の国語政策ではとりあげられませんでした。とりあげてこれなかった文字表記以外の問題も、現代の言語問題としてより大きなものになっているのではないかと思います。そういったことは、引き続き、文字表記の問題だけでなく国語研究所で基礎的な研究をして、何らかの提案を世の中にしていくべきだと思っております。

**小木曾** 他に、補足すべき点などありましたら、いかがでしょうか。

では、時間が迫ってまいりました。今日の

フォーラムは「近代の日本語はこうしてできた」というテーマでした。この問題に対してまったく異なる五つの側面から光が当てられたと思います。それぞれが、「こうやってできた」というご回答だったと思いますが、そのすべてのご発表が今のわれわれのことばに、かなり直結していることがわかれて、大変興味深く思ったところでございます。本当は、この現代語とかかわる問題についてもいろいろな議論ができると思うところですが、時間がきてしまいましたので、今日はここまでとさせていただきます。講師の先生方、ありがとうございました。

以上でパネルディスカッションを終了いたします。